＜書評＞

千石英世著

『9・11／夢見る国のナイトメア—戦争・アメリカ・翻訳—』

（彩流社、2008年）

関根　全宏

千石英世の『9・11／夢見る国のナイトメア—戦争・アメリカ・翻訳—』は、三部からなり、1970年代から2000年代にまで渡る長短の評論を集めたものである。そこには、戦争するアメリカという一つのイメージがある。アメリカは、建国以来、戦争によって作られてきた国であり、人種や宗教の問題にいつもつきまとわれている。これが、千石英世が言う「ナイトメア」のことであり、アメリカの「身体」の重さでもある。「アメリカという身体とは、そのことから自由になれない身体を引きずるアメリカそのもののことであった。アメリカはアメリカを引きずっているのだ」(7)。つまり、アメリカは「重い身体」(7) から自由になることを夢見ながらも、「ナイトメア」から醒めることができず、その「重さ」を剥ぎ取ることができない国なのだ。本書は20世紀アメリカ小説をめぐる評論が多いが、なかでも、ウィリアム・フォークナーへの言及が大きな割合を占めている。それは、フォークナーが「アメリカの身体を（恥部をもふくめて）描ききった作家」(8) であるからにほかならない。

アメリカとは何か、アメリカ小説とは何かを論じながらも、翻訳をめぐる問題をいたるところで取り上げる千石英世の態度は特異であるようにみえる。翻訳は「発見のともなう仕事」、「まさしく文学者たるひとのする仕事」であるという言葉には (194)、翻訳という営みが、文学という営みに通じているという著者の

信念がみてとれる。しかし、それだけではない。著者は、翻訳するという視座で文学テクストを論じてもいる。著者にとって、言葉の置換というものが、作品を読み解く上で一つの重要な方法論になっているのに違いない。つまり、本書において、翻訳論と文学論とのどちらが≪地≫で、どちらが≪図≫になっているのかが判別しにくいほどに、「翻訳文芸論」(9) というサブ・サブタイトルが滲み出ている点が特異なのだ。著者が「はじめに」においてささやかに付しているサブ・サブタイトルが、本書の際立った特徴の一つを言い当てている。

このような、翻訳に対する著者のこだわりは、言葉の言い換えや読み換えとしてあらわれているのだが、それが生じるのは、著者が「複層」を前にするときである。「戦争するアメリカ」と題された第Ⅰ部のカーヴァーとピンチョン論においては、「同時多発テロ」(35) という日本語タームに感じる違和から翻訳論が展開され、それは、テクストが孕む言葉の「同時多発的多義性」(38) の発見と物語の再解釈という文学論へと有機的に接続されている。また、第Ⅱ部「アメリカという身体」においては、ホーソーン、メルヴィル、フォークナー、トウェイン、ショパンらの小説が論じられるが、それぞれの「複層」は、語り口、名前／発音、笑劇と悲劇といったように多岐に渡る。しかし、それらがいかなる水準であれ、著者はそれらに意味を与えるというよりも、二重三重にもなった重なりの各層を一枚ずつ剥がしてみせ、そうすることで見えてくる意味を捉えようとする。さらには、言葉に多義性が生じると「作家の文体が捩れる」(127) ならば、文体論が展開されるのは必然であり、ここに著者が文体にこだわる理由が垣間見られる。かくして、第Ⅲ部は「翻訳から文体へ」と題され、古井由吉、西脇順三郎、福原麟太郎、吉田健一らの文体が論じられる。

とはいうものの、文学論が翻訳論や文体論に収斂されているのかと言えばそうではない。「あとがき」において、第Ⅲ部「翻訳から文体へ」を、「ⅠとⅡに達する方法としての文体への関心」(306) として位置づけているように、文体を論じる千石英世が念頭においているのは、文体の分析そのものというよりも、それを通していかに文学テクストを読み解くことができるのかという問題である。ここでいう文体が、「思考のスタイル、あるいは書かれようとしている文章の踏み行くジャンルをも遠望する意味でいう文体」であり、「言語に根ざす想像力とイメージに発する言語の運動が出会う場としての文体」であるならば (306)、文学論へと通じる読解が翻訳論／文体論において展開されることも不思議ではあるまい。また、本書には、以前の著作には見られなかった講演草稿が収載されているが、口語体を文語体に翻訳せずにそれを収めようとする態度にも、著

者自身の「思考のスタイル」や、文体に宿るイメージや「言語の運動」をそのままみせようとする身振りを感じ取ることができるはずである。

「世界はactualityとtextualityの複層のなかに浮上してくるように思い成される」(143) という言葉も、著者の「翻訳文芸」観に発するものである。千石英世は、各論において、それぞれの「複層」に覆われている「文学と人生における痺れるような真実の交点」(125-26) を読者にみせてくれている。